

# アジアを讀む

19

## 中台関係— 動き出した歴史の地下茎

80年代末から90年代にかけて、香港を足場に台湾へ取材に出かけたものだった。当時は蔣経国総統が死去し、李登輝氏が総統に就任した直後だった。報禁がゆるみ新聞社が乱立、野党の合法化など、いわゆる民主化が急速に進展した時代だった。蒋介石体制のもとで海外に逃れた反体制派のリーダーが相次いで帰還、政治的権利のさらなる

拡大を要求する街頭デモが日常的に行われていた。

ただ、蒋介石ファミリーの支配体制のくびきから完全に脱しきれず、まだ社会にどんよりとした空気が鬱積していたそんな時代だった。当時は国民党の枕詞に「執政党」という古風な表現を使ったものだった。「政権党」ではなく「執政党」という言葉を使ったのは、将来も政権は代わりようがないだろうという「万年与党」の意味を込めたものだった。

当時の国民党秘書長は宋楚瑜氏（現親民党主席）、外相が連戦氏（現国民党主席）だった。宋楚瑜氏にはインタビューを申し込んだが、その都度、宿泊しているホテルに花束とともに辞退する手紙が届いた。単独での取材は実現しなかったが、花束を送ってくる心遣いに妙に納得したのもだった。連戦氏の記者会見では米国留学仕込みの流暢な英語と洗練された身のこなしに、新しい台湾政治家像を見た思いがした。その二人が中国を訪問し、胡锦涛主席らと会談。中台関係を動かす台湾側の主役を演じている。「第三次国共合作」と謳（うた）う気の早いメディアすらある。「国共合作」と聞くと、思い出す光

景がある。90年の6月1日。閩東軍に爆殺された張作霖氏の長男で、第二次国共合作（国共抗日統一戦線）のきっかけとなった西安事件の主役、張学良氏が54年ぶりに公の場に姿を見せた。半世紀もの軟禁生活から解放されて名誉を回復、90歳の誕生日に台北で記者会見した。苦楽をともにした趙一萩夫人が付き添っていた。さらに蒋介石氏の側近中の側近で、辛亥革命にも参加し、戦後の国共停戦協定（46年）の国民党側代表をつとめた当時92歳の張群氏も同席した。

記者会見の場所は、西安事件で張学良氏に監禁された夫の蒋介石氏を救うために現地に乗り込んだ宋美齡氏ゆかりの円山ホテルだった。まさに会見場はセピア色の世界だった。クリスマスチャンになった張学良氏がその場で「90歳まで生きられたのはイエス・キリストのおかげ」と長寿を喜びながらも、「むなししい人生の好例が私だった。できれば余生を社会に尽くしたい」と語ったことが印象的だった。この会見後に、よい機会だと思いつくまでが大変だった。地図にも記載がなく、近くに住む住民に聞いても首を

かしげるばかりだった。目的の場所は寂しいところにあった。20年代から30年代にかけ、黄金時代の上海の政財界を牛耳り、蒋介石氏が第一次国共合作を覆して共産党弾圧に転じた上海クーデター（27年）に協力した杜月笙氏の墓である。

杜月笙氏は共産党政権の樹立直前の49年に家族とともに香港に逃れ、51年に香港で没した。蒋介石氏はかつての盟友の遺体を密かに香港から台湾に運び、台北郊外に手厚く葬ったといわれる。丘陵地帯にあつたその墓は歴史のなかに埋もれているようだった。当時、杜氏の子息がまだ香港に健在だと聞いたが、いまはどうだろうか。

張群氏は90年に、張学良氏は2000年に亡くなった趙夫人の後を追うように翌年に死去。宋美齡氏も2003年に波乱の生涯を閉じた。第二次国共合作のプレーヤーは去り、国民党は今や執政党ではない。そのかつての国民党のホープが共産党との対話を模索、国共両党は常設の対話機構を設けることで合意した。それぞれの思惑を秘めた地下茎は今度も歴史を作るのだろうか。

日経香港社 奥村幸広